

序論)

前回、パウロは「私は、すぐれたことばや知恵を用いて神の奥義を宣べ伝えることはしませんでした。」(1 節) とか「十字架につけられたキリストのほかには、何も知るまいと決心していたからです。」(2 節) と語っていました。このようにパウロは知恵を用いて語ることを否定していたのです。

ところが、今日の箇所になってみるとパウロは一転して「しかし私たちは、成熟した人たちの間では知恵を語ります。」と語っています。

片や「知恵を用いて神の奥義を述べ伝えることはしない」といいつつも、片や「成熟した人たちの間では知恵を語ります」という。これはどういうことなのでしょうか？

今日は、パウロが語る知恵とはどのようなものか。そして、その知恵はどのように得ることができるのか。聖書からおしえられていきたいと思います。

1) パウロたちが語る知恵 -最初から定められていた神の奥義-

2:6 しかし私たちは、成熟した人たちの間では知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でも、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。

先ほどいったように、パウロは今まで「すぐれたことばや知恵では宣教をしなかった。」と語っていたのに、ここに来て手の平を返したかのように「成熟した人たちの間では知恵を語ります」といっています。

ここでいう「成熟した人たち」というのは、信仰的に成熟したベテラン・クリスチャンというよりは、この世の人たちにとっては愚かと思える十字架のことばを神の力として受け取れるようにされた人たちのことです。つまり、救われた人たちですね。もちろん、パウロは信仰的な成熟があるということをこの手紙や、他の手紙でも語っています。しかし、この 2 章の文脈は段階的な信仰の成長というよりは、神様の知恵を理解出来る人とできない人の違いを明確に語っている箇所なので、私達の立場の大きな変化である救われているか、救われていないかの違いを意識して、救われている人たちのことを「成熟した人たち」とパウロが言っているのでしょう。

パウロは、まだ救われていない人たちに対しては知恵を用いて語ることはしていないけども、救われた人たちには、この世の知恵でも、支配者たちの知恵でもない

別の知恵をもって語っているというのです。

では、そのパウロたちが語る知恵とはなんなのかというと 7 節

2:7 私たちは、奥義のうちにある、隠された神の知恵を語るなのであって、その知恵は、神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定めておられたものです。

この 7 節には、パウロたちが語る知恵の特徴が 2 つ語られています。

一つはこの知恵は奥義として隠されていた神の知恵である。ということ、そして、もう一つは、この知恵自体は世界の始まる前から定められていたものであるということです。

ここで、1 章で神の知恵とは何のことを指していたかを思い出してみましょう。1 章でパウロは、「神の知恵とはキリストである」(1:24) と語っていました。また、30 節では「神の知恵とは、義と聖と贖い」だと言っていました。

つまり、人々に対して隠されていたけども、世界の始まる前から定められていた神様の知恵とは、【主】イエスキリストご自身のことであり、そのキリストによって私達が義と認められ、聖められ、そして、やがて完全な贖いを与えられるということです。簡単に言えばキリストによる救いですね。神様は、【主】イエスキリストによって私達を救い出すという計画を、世界が始まる前から計画されており、それを奥義として隠して来られたのです。

神様によって隠されていたことですから、当然、この世の支配者たちはそのことを知る事ができていませんでした。もし、知っていたら 8 節にあるように (8 節表示)、救い主であるキリストを十字架に架けて殺すことはしなかったでしょう

2:8 この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。

パウロは 8 節でキリストのことを「栄光の主」と表現していますが、これはこの箇所にはかないキリストが最も栄光を持っておられるお方であることを示す言い方です。十字架によって私達を救ってくださったお方は、この世の支配者など比べることができないような栄光を持っておられるお方です。だから、ピラトや、ユダヤ人指導者たちがそのことを知識ではなく、実感として分かっていたならば、イエス様を十字架にかけることなどしなかったと思います。

でも、彼らはこのお方のことを知る事ができなかった。なぜならば 9 節にある

ように（9節表示）このキリストによる救いの計画は、人が思い描く出来事の外にある事だったからです。

2:9 しかし、このことは、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛する者たちに備えてくださった」と書いてあるとおりでした。

よく科学の発展を語る時に、人がイメージすることができること、想像で思い描くことができることは、いずれ人が実現することができるだろう。とされています。事実、今は当たり前のように行われているビデオ通話とか、飛行機によって遠い所に行くとか、そういったことは昔の人にとっては夢物語でした。でも、人はそれを実現していきました。いずれ、テレビアニメで語られるような地球以外の星で人が生活する時がくるかもしれません。

でも、神様が計画されたイエス・キリストという救い主によって、すべての罪が背負われ、その御方の死によって私達の罪が赦されるなどということは、人の想像を超えたものだったのです。だから、この世の支配者たちはこの神様の知恵を知ることができませんでした。

みなさん、覚えてください。神様の救いは、私達人間が考えられる範囲の外から与えられるのです。私達が考えられる枠の中には神様の救いの計画はないのです。

2) 御霊による知恵の啓示 -神様のことは御霊だけが知っている-

では、なんで私達はその神様の知恵を知ることができているかというと、御霊によって教えられたからです。10節、11節を読みましょう。

2:10 それを、神は私たちに御霊によって啓示してくださいました。御霊はすべてのことを、神の深みさえも探られるからです。

2:11 人間のことは、その人のうちにある人間の霊のほかに、いったいだれが知っているでしょう。同じように、神のことは、神の霊のほかにだれも知りません。

神様の知恵、神様の計画は人間の理性や知性の外にあります。では、その神様の知恵を知るためにはどうしたらいいかというと、神様ご自身のことをよく知っているお方を通して教えられるしかありません。

そして、私達に、私達の思いを超えた働きをなさる神様のことを教えてくださるのが、神の霊であり、聖霊なる神様である御霊です。

ここに今日のポイントの2つ目があります。今日のポイントの2つ目、それは「神様のことは聖霊によらなければ、知ることができない。」です。

3) 神の知恵の語り方 -御霊を受けて御霊のことばを語る-

みなさん、私達、聖書信仰を掲げている福音派は聖書研究をよくします。実際、私のメッセージは聖書研究的メッセージですし、水曜祈祷会も聖書研究的にみことばを学んでいます。でも、どんなに私達が理性や知性をフル回転して聖書を研究したとしても、聖霊が働いてくださらなければ、本当の意味で神様の御心を知ることができないのです。だから、私達は聖書を読む時、「聖霊様が私達に聖書のみことばを教えてください。」と祈りますし、いつも、聖霊様の働きによって【主】を知ろうとしなければいけません。みなさん、このように聖霊により頼んで、神様のことを教えてもらえるということは大きな恵みなのです。パウロも12節でこのように言っています。

2:12 しかし私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神からの霊を受けました。それで私たちは、神が私たちに恵みとして与えてくださったものを知るので

私達が聖霊によって神様の知恵を知ることができる。それ自体が大きな恵みです。そして、神様の知恵は聖霊によってしか、知ることができないからこそ、神様の知恵であるキリストの福音を語る時も、聖霊によって教えられたことばによって語らなければいけないのです。これが3つ目のポイントです。

13節を読みましょう。

2:13 それについて語るのに、私たちは人間の知恵によって教えられたことばではなく、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばによって御霊のことを説明するのです。

みなさん、みなさんはイエス様を証ししようとするとき、また、他の人に聖書を伝えようとするとき、どのような準備をなさっているのでしょうか。一生懸命自分の証しの原稿を読み返して、おかしいところがないか、調べたり、練習をしたりされるのでしょうか。そのようにして証しを備えることも、とっても大切です。

でも、最も大切なのは、聖霊により頼み、御霊によって教えられていくことです。実際、私もどんなに多くの注解書やメッセージ集を読んで聖書研究をしたとし

でも、聖霊によってみことばに対する感動、悟りが与えられなければ、大胆に説教をすることができません。私達は聖霊によって教えられなければ、ふさわしく語ることができないのです。

みなさん、証しをしようとする時、また、聖書の話しをするとき、まずは聖霊により頼んで、みなさん自身が【主】から神様の知恵を教えられてください。

また、私は、みなさんに家庭礼拝を勧めています。それは皆さんの信仰が整えられるためであり、同時に信仰継承や信仰教育は日曜日の子どもメッセージや教会学校だけでは足りないからです。私達が一番最初に聖書を伝えるべきなのは子どもたちや、家族です。その家族に【主】の計画を教えるためには、ただ聖書を開いて読むだけでなく、聖霊様により頼んで、聖霊様の導きを受けながら、聖書に教えられることが大切なのです。

4) 生まれながらの人の特徴 -御霊に属さないし、御霊のことばを理解できない-

私達は聖霊様によって神様の知恵を教えられることができます。では、【主】によって救われていない人、キリストによって新しく生まれていない人たちの状態はどのような状態なのでしょう。14節を読んでみましょう。

2:14 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。

「生まれながらの人間」というのは聖霊によって知恵が与えられていない人のことですね。聖霊によって神様の知恵、キリストによる救いを理解できるようにされていないから、その人たちにとって、2000年前に十字架につけられて殺されたキリストが、救い主だといわれても、ピンとくることができないのです。むしろ、その人達は、キリストによる福音を愚かなことだと感じるでしょう。

そればかりか、聖霊によって教えられていない人たちは、私達がキリストを信じ、【主】に献身していくということ自体が馬鹿みたいに思うのではないのでしょうか。私達、【主】を信じ、キリストを信じる者の生き方の価値というものは、聖霊によって判断しないと、正しく評価されることはありません。

例えば、私達が【主】にならって誰かのために自分の財産を犠牲にするとか、誰かを救うためにあえて損をするような選択をしたとき、それは聖霊によってキリストを救い主と信じるようにされていない人たちにとっては愚かなことだと思えるでしょう。でも、それでいいのです。なぜならば、そういった【主】に喜ばれるこ

と、聖霊の導きに従うことは、御霊に属することであり、「御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。」これが第四のポイントです。

だから、私達、聖霊の導きを受けている人は、例え損と思えるような歩みをしていても、自分を犠牲にするような歩みをしていても、そこに価値があることを正しく判断することができます。15節（15節表示）の「御霊を受けている人はすべてのことを判断します」というのはそういうことです。

でも、逆に日曜日、教会に集って【主】を礼拝する価値とか、【主】のために奉仕する価値とか、そういうことがわからなくなって、礼拝や奉仕をめんどうに思ったり、後回しにするようになったりしたら、聖霊の導きから離れてしまっている状態かもしれません。

御霊の導きに従う人の生き方は、同じ御霊の導きを受けている人以外は、誰にも評価されないものだからです。15節後半の「その人自身はだれによっても判断されません。」というのはいふことです。

この世の人たちが私達の生き方を理解できないのはある意味であたりまえなのです。16節前半の

2:16a 「だれが主の心を知り、主に助言するというのですか。」

というのは、この世の人たちには神様の御心に達することができないことを意味しています。

結論 私達は、キリストの心（御霊）を持っている-

大切なのは、16節最後のことばです

2:16b しかし、私たちはキリストの心を持っています。

この世の人たち、生まれながらの人たちには、聖霊によって導かれ、神様の知恵を教えられている私達の信仰や、私達の生き方は理解されません。でも、私達の心には確かにキリストの心が与えられているのです。この「キリストの心」こそ、聖霊様のことであり、神様の知恵のことです。

みなさん、私達はキリストの心を持っています。これは生まれたままの人にはない、大きな恵みであり、神様から与えられた特権です。

私達は人間の知恵では知ることができない。人間の理性や知性の外にある神様の知恵を与えられ、それを理解させてくださる聖霊様を与えられ、そして、キリストの心を持つようにされているのです。

それはつまり、三位一体の神様の働きが私達の中にあるということです。

みなさん、この大きな恵みに感謝しましょう。

そして、私達に特別な知恵を与えてくださる。聖霊様により頼んで歩いていきましょう。聖霊様によって【主】をもっと知り、聖霊様によって【主】を礼拝し、【主】に従うことの価値を教えられていきましょう。

そして、聖霊様によって、キリストの福音と聖書の真理を語り続けていきましょう。